

群 教 セ	K05 - 03
	平 15.213 集

# 日本と外国との暮らしの違いを知る 国際理解教育の工夫

- Eメール交換を活用し、食文化について調べる学習を通して -

特別研修員 伊藤 洋一（群馬町立国府小学校）

## 《 研究の概要 》

本研究は、国際理解教育の出発点として、日本と外国との文化の違いを知る子どもを育てるための指導のあり方を明らかにしたものである。まず、子どもたちにとって最も関心の高い身の回りの「食」について調べ、webページにアップロードする。次に、それをきっかけに外国の子どもとEメール交換を通して理解を深め、さらに実際に料理をして比べる。その中で感想を「カード」にまとめていながら、暮らしの違いを知る実践である。

【キーワード：国際理解教育 自国文化理解 異文化理解 インターネットの活用 カード作成】

## 主題設定の理由

国際理解教育とは、本来「異文化に対する理解や、異なる文化をもつ人々と協調して生きていく態度などを育成することはきわめて重要なこと」(中央教育審議会第一次答申、1996年7月)の考えのもとに、国際社会の中で日本人としての自覚をもち、主体的に生きていく上で必要な資質や能力の基礎を培うことである。しかし本校における国際理解教育は、主として総合的な時間の中での英語活動を中心とした学習にとどまっており、さらに工夫が求められる。

本校児童の国際理解に関する意識を知るために、本校4年生(4年2組、28人)に自分の身の回りの衣・食・住について、日本のことを何も知らない外国人に説明できる自信を持っているか(言葉は通じるものとして考える)アンケートを行った。すると「自信がある」「まあまあ自信がある」と答えた子どもが43%、「ちょっと自信がない」「全くできないと思う」と答えた子どもが57%であった。自信がない理由は、「自分もよく知らないから」と答えた子どもが80%以上であった。この結果から、自分たちが生活している日本の、さらに身近な身の回りのことについてでさえ、しっかりと学んだ経験が乏しく、それが自信の無さにつながっていると考えた。国際理解教育は「自国文化理解」と「異文化理解」がいわば車の両輪のように、その基礎となることが必要不可欠であるにもかかわらず、ほとんどその両者について学んでいかなかったことがわかった。

そこで、本学年の国際理解教育の出発点として、子どもたちが日本と外国との暮らしの違いを知るための実践を行うこととした。本学年の段階においては、暮らしの違いを知ることはそれぞれの国について深い知識を身に付けることではなく、それぞれの暮らしについて調べていく中で子どもが自然に知識を得、さらにその違いに気づくことと位置付ける。それが今後の異国文化の多様性を認める力を高めていく学習の土台となると考え、本研究主題を設定した。

## 研究のねらい

総合的な学習の時間において、インターネットを活用し「食」に関する知識を得、自分たちで食べ物を作るという体験活動を行うことで、日本と外国との暮らしの違いを知ることを実践を通して明らかにする。

### 研究の見通し

次の見通し1から4の取り組みを行うことで、日本の良さを「私たちの暮らしじまんカード」、相手の国の良さを「外国のすごいところ発見カード」として自分なりに書き留めていく。その積み重ねの過程で、それぞれの暮らしの違いに気づいていくであろう。

- 1 子どもたちが自分たちの身の回りの「食」について調べ、それを整理し、webページに発信するという学習をすれば「日本を知る」意欲が起こるであろう。
- 2 子どもたちが知りたいことをEメールを利用して外国（相手の国）の子どもに質問し、答えてもらうことにより、外国に対する興味・関心が高まるであろう。
- 3 交流相手からの質問に答えていく過程で自分たちの身のまわりの「食」に関する調べ活動を行うことで、「日本を知る」学習が深まるであろう。
- 4 子どもたちが得た情報を基に、日本の食べ物と相手の国の食べ物をそれぞれ作って、それらを比較すれば、実際の体験を通して「食」の違いを感じ取ることができるであろう。

### 研究の内容

# 1 基本的な考え方

## (1) 用語の説明

### ア 「自国文化理解」とは

本研究において、自国文化理解とは、現在の日本における文化、習慣、言語などについて、ただ「知っている」や「見たことある」というレベルにとどまらず、実際にそれらの文化に触れたり由来を調べたりして、それらに積極的に関わり、自分なりに「こういうものである」としてしっかり定義できる力にとらえたい。

本研究においては、学習範囲が広がりすぎることを防ぐ意味から「食」に絞って活動させるものとする。将来的には、それらのものの中から起源が外国にあるものがあることにも気づき、学習に深まりや広がりが出てくるであろう。まさにそれこそが自国の文化を理解していくことにつながるものと考ええる。

### イ 「異文化理解」について

インターネットを通じて「外国の児童と交流をするために、相手の国のことを知ろう」という動機付けをすることで、より外国に対する興味・関心が高まると思われる。

この場合の異文化理解とは、「食」を中心に相手の国のことを学び、それと自国のことを比較し、その違いに気づくことにとらえたい。その後さらに発展させて、その多様性を認めていく力につなげていくべきものであると考ええる。

### ウ 「コミュニケーション能力」について

言語はあくまでもコミュニケーションの手段であり、その内容を伝えることがその目的である。本研究において子どもたちは、webページ上に英語で発信したり、それを見た相手国の子どもたちが英語で質問をし、さらにそれに答えていく。そのやり取りはインターネット上の翻訳機能を使うとはいえ、ベースはあくまでも英語である。これら一連の学習を通し、子どもたちは外国語を「便利なコミュニケーションの手段」だと実感するであろう。そのような意識の下、現在本校で行われている英語活動に子どもたちが参加していくことは意義が大きいと考ええる。

## (2) 全体構想図 (図1)

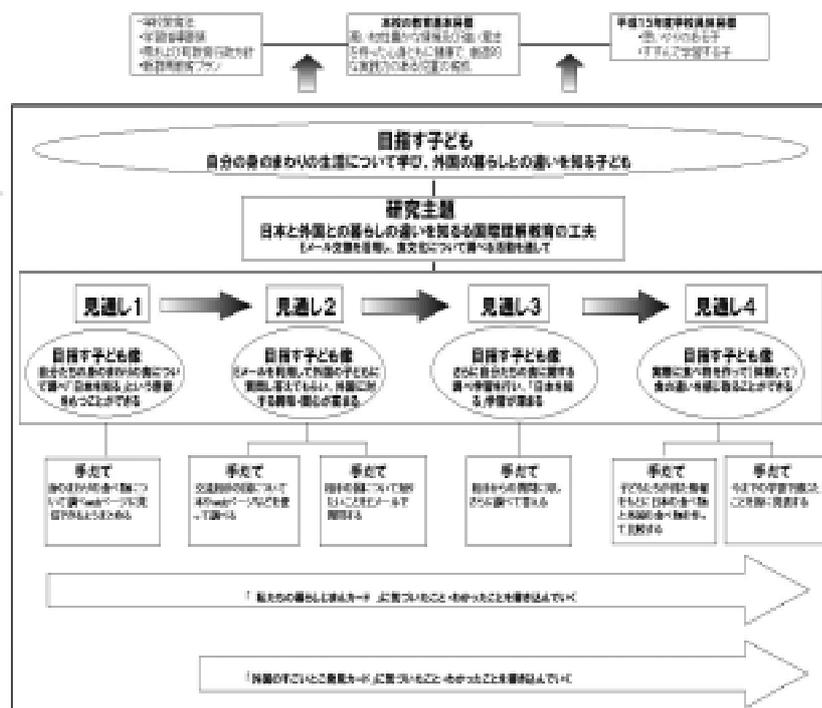


図1 全体構想図

## 2 実践の概要及び結果と考察

結果の考察にあたっては、学級全体の活動の様子および抽出児童A子による学習カードの記

述、Eメールの記述により行う。

A子は、普段の授業等は積極的に発表したりすることが多いが、事前にとったアンケートでは、日本のことを外国の人に紹介できますか、という問いに「たぶんできない」と回答し、その理由を「日本のことがよくわからないから」と書いていた。

(1) 日本を知る意欲が起こったか。(見通し1)

#### ア 実践の概要

子どもたちそれぞれが自分の興味・関心に基づいて、「食」について調べる学習をした。これは主に、夏季休業期間を利用し、各個人が祖父母や両親への取材、図書館での文献検索、インターネットを利用した検索等を中心に調べてきたものを基にして、二学期前半に総合的な学習の時間の中で、ほぼ同内容の児童をグルーピングし、複数で深めていく形をとった。

「だれが見てもわかるようなものにしよう」を合い言葉に、絵や写真等を使って工夫するよう助言した。パソコンへの文字入力ができる子どもは自ら入力し、そうでない子どもについては担当教師が入力した。外国の人への発信という意味から、英語版のwebページも併設した。

#### イ 結果と考察

「食」について調べるという活動の中で、知識を検索・調べるだけでなく、家族に協力してもらって実際にまんじゅうを作ったりうどんを打ってきた子どもも何人かいた。また、食べ物の由来や製法などを調べていくうちに、今まで知らなかったことや間違った知識としてもっていたということがわかり、「驚いた」という感想をもつ子どもが出てきた。

おばあちゃんが生まれた頃にできたと思っていた食べ物が、奈良時代という大昔からあったことがわかり、また日本古来の食べ物だと思っていたものが、実は中国から伝わってきたことがわかった、という新たな発見があったなどの感想を書いた子どもが28人中25人いた。A子も調べたいという意欲をもちはじめた。(資料1)

これらの活動を通して、子どもたちは食べ物について知ろうという気持ちをより意欲的にもつことができるようになったと考える。

(2) 外国に対する興味・関心が高まったか。(見通し2)

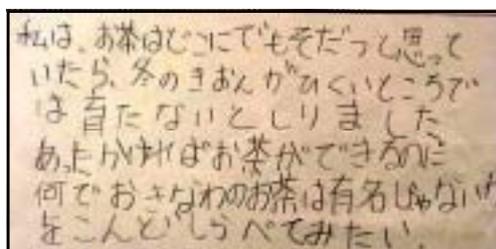
#### ア 実践の概要

交流相手校を探すために、インターネットを介した交流授業を希望する世界中の教師向けサイトに本校の紹介および交流希望の趣旨を記述した文章を掲載した。その後、多くの学校から交流希望が寄せられたが、地域性や交流内容を考慮し、相手校をアメリカ合衆国、大韓民国、パキスタン・イスラム共和国の小学校に絞った。子どもたちは、同年齢の外国の子どもたちと交流ができることに強い関心を示し、自己紹介および簡単な日本の紹介文をEメールで相手に送った。また、相手の国について文献やインターネット等を活用して自分たちなりに調べ、さらに知りたいこと(特に食について)を相手に尋ね、知識を得ていった。

#### イ 結果と考察

子どもたちはEメールの交流で、まず始めにお互いのプロフィールや趣味などの紹介をしていたが、徐々に自分たちの学習と絡めて食べ物についての質問を出すようになっていった。(資料2)初めは、「アメリカってハワイと違う

#### 資料1 A子の私たちの暮らしまんカード



#### 資料2 質問のEメール

- ・アメリカにも寿司屋さんがあると聞きましたが、寿司のネタにはどんなものがありますか。
- ・玉子を使った料理で、日本には目玉焼きがあるけど、アメリカにはどんな料理がありますか。
- ・韓国のお料理は、みんなからいのですか。
- ・パキスタンでもお米を食べるのですか。

の?」「パキスタンってどこ?」などのように28人全員が、国の場所さえも正確に答えられなかった。しかし、昼休みにパソコン室を開放し、ほぼ毎日パソコンが全て使用されるほど熱心にメール交換や調べ学習を続けていく中で、子どもたちは自然と知識を身につけ増やしていった。例えばアメリカからの「明日はサンクスギビングデーです。おじさんの家に集まって、みんなで料理を食べながら、女の人はお話を、男の人はテレビでフットボールを見ます」というメールに子どもたちは「どうして男と女が別のことをするのか」「日本にはこういうお休みはなかったっけ?」というようにお互いに話し合う場面が見られた。国の場所や食べ物について「わかるようになった」「もっと知りたい」と答えた子どもが28人中24人であったことから、知的好奇心が広がっていったと考えられる。A子は、食べ物を調べていくうちに、偶然違う国同士の料理が同じだと気がついた。そこからその国の成り立ちにまで思考が発展していった。(資料3)

### 資料3 A子のEメール

パキスタンの料理って、インドの料理と同じなんですね。調べたら前は、同じ国って書いてあったけど本当なんですか。どうしてわかれちゃったのかな?

(3) 日本を知る学習が深まったか。(見直し3)

#### ア 実践の概要

交流相手校から、本校ホームページを見たあと日本の食文化についての質問メールが届いた。(資料4)その質問に答えるために、さらに自分たちの身のまわりの食文化について調べる活動を行った。

#### イ 結果と考察

子どもたちは、自分たちが予想していなかった質問の内容に驚き、まず、ものの感じ方の違いに気づいた。それと同時に、自分たちが思っていたことに反して、外国の人は日本のことをあまり知らないことにも驚いていたようであった。

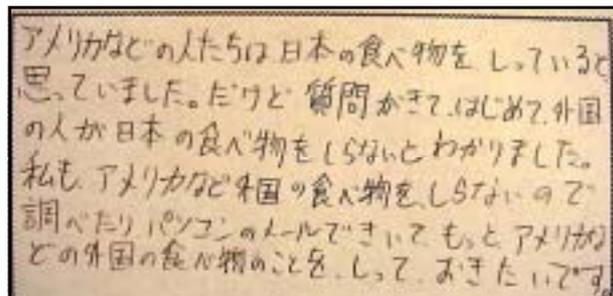
研究当初は、この質問に答えるために、さらに日本の食文化を調べたいという意欲がわいてくるであろうと考えていた。しかし、資料5の感想にもあ

るように、「私も外国のことを知らないとわかった」だから「もっと外国のことを知りたい」という方向に思考を展開していく子どもが過半数であった。外国との交流を始めたことにより、子どもたちの意識が予想以上に外国の文化に向いていった。日本のことより外国のことを知る

### 資料4 外国からの質問メール

- ・納豆はおかしなのですか。ネバネバしているみたいだけど、どうやって食べるのですか。
- ・私はからいスパイスの寿司が好きです。日本では毎日寿司を食べていますか。アメリカではのりは巻きません。好きじゃないからです。また、かきのフライやエビの天ぷらがのっていたりします。日本ではどうですか。

### 資料5 私たちの暮らしじまんカード



という学習の方が、学習を始めたばかりの子どもたちにとってより関心が高いということがわかった。

それを認めた上で、さらに質問に対して、一言だけで返答するのではなくその由来を考える、また、初めの調べの段階で疑問に思ったことなどをさらに深めるよう投げかけた。資料探しの段階でつまづいている子どもには、資料の提示をするなどの支援をした。その結果、日本の食文化に関する学習を深めることができたといえる。特にA子は、資料6にあるように初めに抱いた疑問について調べ、お茶についての理解、また同じ日本の中でも沖縄という地域の特性についても気づいてきている。

ここでは子どもたちが、興味本位の学習に流されていくのを防ぐ意味からも、教師側が支援方法を工夫していくことが大切である。

(4) 実際の体験を通して「食」の違いを感じ取ることができたか。(見通し4)

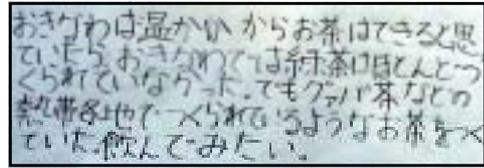
#### ア 実践の概要

子どもたちのメールのやりとりの中で出てきた共通の素材である「じゃがいも」を使った簡単な料理を、日本とアメリカ合衆国、大韓民国、パキスタン・イスラム共和国それぞれの作り方・味付けで料理し食べ比べてみた。なお、アドバイザーとして地域の栄養士さんにも協力していただき、作る過程での違い、味や栄養面での違いを随時指導してもらうことにより、子どもたちの視点が食の違いに向くようにした。

#### イ 結果と考察

ホームページなどを通して学習し、料理について理解していたはずの子どもたちが、自分の嗅覚・味覚で感じたものはまた違ったようであった。事後に書いたカードは資料7のように全員が新たな発見を書いていた。特に、日本には無い臭いや味を感じ取ったという内容の感想を書いた子どもが28人中18人いたことから、子どもたちが日本と外国との違いに気づくことが

#### 資料6 A子の私たちの暮らしじまんカード



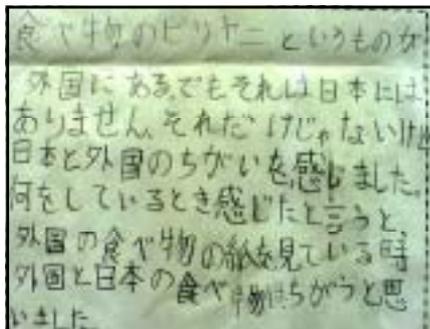
#### 資料7 外国のすごいとこ発見カード

- ・食べる前は韓国料理はからそうだなと思っていました。でも食べてみてホットケーキみたいだった。
- ・韓国チヂミは、あまりにおいがしなかった。モチモチしておいしかった。こういうのははじめて食べた。
- ・マッシュドポテトがこんなにふわふわだとはそうとうはんたいだった。生クリームの味がしたのがふしぎ。
- ・パキスタンのじゃがいもはシナモンとカレーのにおいがした。まさかこんなにからいとは思いませんでした。でもご飯と一緒に食べるとおいしいと思います。

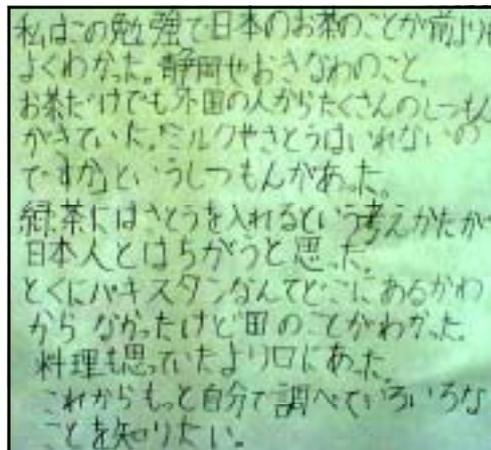
できたと考える。最後のまとめの授業では、全員がこの学習で感じたことを発表し合った。

子ども  
たちは  
それぞ  
れ食べ  
物から  
日本と  
外国と  
の違い  
を感じ  
取って  
いた。

#### 資料8 発表会用の感想文



#### 資料9 A子の発表会用の感想文



(資料8)また、資料9からA子は、「お茶」を通して日本におけるその生産の様子や地域の特性にまで思考が発展していていることがわかる。また、Eメール交換の中から外国の人の考え方の違いに驚きながらも、国の成り立ちを学び、料理の違いも肯定的にとらえている。さらに、今後の学びに積極的にかかわっていこうとする意欲を読み取ることができる。

子どもたちは、webページやEメールという手段を通して、「調べる」「質問する」「回答しさらに実際に体験する」という活動を行うことによって、それぞれ食文化について知識を得ていくことができた。さらに知識や感想をカードに記入することにより、学習の成果を蓄積することができ、それぞれの文化の違いに気づくことができたと考える。

### 研究のまとめと今後の課題

#### 1 研究のまとめ

子どもたちにとって、関心の高いコンピュータを活用したことは、強い意欲付けになったとともに、距離と時間の制約を考えずに取り組めることから、国際理解教育の分野では特に有効であった。

調べ学習などの机上の知識だけではなく、実際に作る・食べるなどの体験活動を取り入れたことで、その違いをより明確にとらえさせることができた。

感じたことをより細かく、カードに記入させたことにより、その時々気持ちを自分なりに整理するとともに、自分が違いに気づいていく気持ちの変化を感じることができた。

#### 2 今後の課題

本研究は、日本と外国の文化についてほとんど意識していなかった子どもたちに「違いを知る」という、いわばはじめの一步を踏み出させたものである。本研究は「食」に絞ったものであったが、今後は生活全般、文化にも対象を広げていくことが大切と考える。さらに、今後自国文化理解の深化、異文化の多様性を認知する力の育成、コミュニケーション能力の育成を図っていくことにより「国際社会においてたくましく生きていく子どもの育成」という国際理解教育の目標に迫っていくことができると考える。

<主な参考文献>

